



海田雲野
kaitamono
illust draw

お前は俺を
弄んだのか!?

敵い
噂の宰相が
まくる!!
デレ



この物語はフィクションです。

実在の人物・団体・事件などには関係ありません。

序章 知らないうちに鉄血宰相を落としていた!!

それは、いつもと変わらないある日のことだった。

終業時刻が迫る頃、メルティは宰相室の前に立っていた。

一年以上、働いて見慣れた黒塗りの大きな扉は、廊下の光に当たりツヤツヤと輝いていて、どこか威圧感を抱かせる。

——さてさて、今日の宰相様のご機嫌は？

メルティはミント色の瞳をパチパチと二度瞬^{まばた}かせ、分厚い扉に聞き耳をたてた。すると、中からくぐもった声が聞こえてきた。

「……ぜ、まえは……ない。か……といつも……」

——うーん、宰相様かなあ。

男性らしき低い声がかすかに聞こえるが、何を話しているのかまではわからない。

より音を拾うため、メルティは身体を扉に近づけた。深緑のドレスのすそと、高い位置で二つ結びにしたウサギの耳のような茶色い髪が扉に触れる。

「……だから……こういうことになる。この仕事は重要な……」

——うん、やっぱりこのハスキーな声は宰相様ね。

特徴的な掠れた声は、すぐに話し手の身元を割り出せる。

プロイセン王国宰相——『鉄血宰相』の異名を持つロイド・ニル・シェーンⅡハウゼン。彼は、厳しくて怖いと評判の人物だった。

無愛想で常に不機嫌で、仕事のミスに関してはことさらに厳しい。そのせいで、宰相室から怒号が聞こえるのもしょっちゅう。

——怒鳴り声じゃない。よかった。今日は当たりの日だわ。

メルティは薄ピンクの唇からホッと息を吐いた。

先ほど聞こえた彼の声色から、今日が比較的、機嫌の良い日だと推測できる。中に用事のあるメルティとしては、宰相の機嫌が良いのはありがたいことだ。

——よし、さっさと仕事して帰ろっと。

メルティは顔を上げ、肩からかけたバックの紐ひもを握りしめた。

衝撃で、はみ出るほど書類が詰め込まれた茶色のバックが揺れて、紐が肩に食い込む。メルティは片方の手でドアノブを掴むと、顔いっぱいには笑みを浮かべて引いた。

「失礼しまーす！ 『お届け課』のプットカマーです。書類のお届けに参りました」
ガチャリという音と同時に、努めて明るい声で言う。

しかし、笑顔のために細めた目に映る室内には、想像もしていなかった光景が広がっていた。

なんと——そこには、中年の男性が若い男性に土下座をする、という地獄絵図が広がっていたのである。

——えっ。

衝撃の光景に、メルティは大きく目を見開いた。

理解が追いつかず、思わずかたまってしまう。

驚いた顔で突っ立っていると、取り込み中だった男性二人がこちらを振り向いた。

「あつ、書類のお届けでーす……」

メルティは引きつる顔をなんとか動かし、苦笑いを浮かべて言った。

要件を伝えるが、彼らから返答はない。沈黙に耐えきれなくなったメルティは、ワザ

と目を細めて視界を狭めた。

「書類は置いていきますので、どうぞお構いなく……」

ニコリと微笑み髪を揺らすと、何も見ていない風を装ってお辞儀をした。
そして、身体の向きを変え、執務室の壁際にある書類置き場へと向かう。

——騙された。

メルティは心の中でため息を吐いた。

宰相の機嫌がいいと思ったのは間違いだった。今日は怒鳴るのではなく、懇々と怒るスタイルだったのだ。

ピリピリとした空気の中、メルティは彼らに背を向け、黒いキャビネットの前に立った。

——さっさと置いて帰ろう。

メルティは仕事を片付けようと重たいバッグを見つめた。

メルティの所属する『お届け課』の仕事は、このカバンに入った書類を各部署に運ぶことだ。

各部署から書類を回収して分類した後、書類を配達するという郵便局のような課は、

この王宮において非常に重要な役割を担っている。

国の中枢ちゆうしゆうを担う役人たちは多くが貴族の出身であり、更に上層部にいくほど気難しい年配者が多くなっていく。そのため、派閥争いはばつや貴族ゆえの横柄な態度から衝突が起きているのだとか。

『お届け課』は、そのための緩衝材かんしゅうざいとして作られた。

——ようは板挟み課……。

お給金は良いが、そのストレスからすぐに人が辞めていく新人つぶしの課とも言われている。

中でも、厳しいと評判の宰相の執務室に入るのは恐ろしく、皆が嫌がるためメルティは仕方なく仕事を請け負うことが多かった。

——もう……こんなことならお昼のジェラートで手を打つんじゃないかった。

今日は、どうしても宰相室に行きたがらない同僚と、昼食のジェラートと引き換えに担当を変わってあげたのだ。

——お説教中が一番気まずいの……。

メルティはチラリと後ろを見た。

あいかわらず土下座を続ける中年男性は見ているだけで痛々しい。

執務室の家具は黒く艶のあるもので、床に敷かれたベルベットの赤い絨毯じゅうたんが恐ろしい裁判所を思い起こさせる。さながら、床の男性を見下ろす宰相が裁判官だ。



——土下座しているのはたしか、税務課のヒューゲル課長補佐官……。

そして、それをさせている灰色に近い白髪的青年が、我が国きつての秀才と称されるロイド・ニル・シェーンIIハウゼン宰相閣下。

宰相はワインレッドのジャケットを羽織っており、金のボタンをきっちり閉めていて、かなりお堅い印象だ。眉を寄せる彼の表情も相まって、不穏なオーラが漂っている。

「次に重大なミスを犯せばクビだと宣告したはず」

怒りを含んだハスキーな声が室内に響く。

「も、申し訳ございませんっ。そこをなんとか、大切な甥おいなのです」

「甥おいならば、お前が躰しつぽを怠ったのが原因だ。監督責任を問われないか？ 減給でも降格でも俺は一向に構わんのぞぞ」

威圧的な言葉が発せられ、床に額ひたいを擦り付けていたヒューゲル課長補佐官は一気に青い顔に変わった。

「そ、それだけのご勘弁をっ！」

「ならば即刻そつこく、甥おいに解雇を告げ、田舎りようちに追い返せ」
骨張ったアゴをクイッとふり、宰相は彼に一枚の書類を手渡した。

チラリと文字が見える。そこには『解雇通知』の文字があった。

——お、恐ろしい……。

背中が冷える感覚がして、メルティは後ろを見るのをやめた。

肩から下げたバックのボタンを外し、中から書類の束を取り出す。そして、紐で結ばれた書類の束を部署ごとにキャビネットの上の容器に並べて置く。

書類を仕分けしていると、後ろで絨毯を踏みしめる音がして、扉を開閉する音が聞こえた。

ヒューゲル課長補佐官が退出したのだ。

「ふん、必ず家柄採用制度など廃止してやる」

ポツリと宰相の独り言が聞こえ、メルティは居心地の悪さを感じた。

ヒューゲル課長補佐官がいなくなったせいで、執務室内に宰相と二人きりになってしまった。

——早く仕分けて執務室を出よと……。

現宰相ロイド・ニル・シェーンⅡハウゼンは、そのあまりの秀才ぶりと家柄の良さから最年少で宰相になった逸材だ。

彼は仕事ができすぎるが故に、他者に厳しく、そのせいで頭が鉄のようにかたい熱血上司、通称『鉄血宰相』と呼ばれたりもしているのだ。

—— 急げ急げ、並べ方を間違えないように注意してつと。

書類を分類して浅い四角の容器に入れ、メルティは振り向いて頭を下げた。

「書類は全て、ここに置いておきますね」

ニッコリと笑顔で顔を上げ、宰相を見ないようにして、そそくさと立ち去ろうとする。それから、メルティが扉の前に立ちドアノブに手を伸ばした時だ。

「待ちたまえ。プットカマー」

「は、はいっ！」

思いがけず後ろから声をかけられた。

急に呼び止められ肩が跳ねる。合わせて緑のリボンで結んだ二本の髪が揺れた。

—— 呼び止められちゃった……。

今のわずかな時間に何か粗相そそうをしてしまったのだろうか。

メルティは眉をへにやりと下げた。

「何か御用でしょうか？」

ゆっくりと振り向く。

すると、正面に宰相の姿が映った。

百九十センチほどありそうな細身の長身が小さなメルティの目に塔とうのように映る。彼は片手を腰に当て、書類の置かれたキャビネットを見た。

「経理部からの書類をこちらへ」

「は、はい」

——よかった。怒られなかった……。

ホッとしたのも束の間、メルティはトボトボと書類を取りに戻った。

——書類が手元に欲しいなら先に言っただけで欲しかったなあ……。

二度手間になり、メルティは唇を閉じ合わせてへの字を作った。しかし、宰相に文句を言うこともできず、書類置き場の前に立った。

そしてキャビネットから経理部の書類を手にとると、口の両端をクイッと上げて彼の方を向いた。

丸く大きな瞳に彼の姿が映る。

彼の背後には大きな執務机と、天井につくほど大きな窓があり、長身の身体が逆光に

照らされていた。

背後からの光のせいかわ彼には謎の仰々きようきやうしさがあつたが、メルティは気にせずブーツで絨毯じゆうたんを踏みしめた。

宰相のそばにより書類の束を突き出す。そして、大きな目で彼を見上げた。

すると距離が近くなつたせいかわ、彼の顔がはつきりと見えた。

鮮やかな紫の瞳と視線が交わり、メルティはわずかに頬を染める。

ロイド・ニル・シェーンⅡハウゼン。彼は灰色ロイドの名の通り、灰色に近い白の髪を持つ男性だ。

その顔立ちは端正で、鋭い目鼻立ちから少し狼を彷彿ほうふつとさせる。紫の瞳はピンクガーネットという宝石のような色で、光が当たると淡いピンク色になり、性格に似合わずちよつぷり可愛い。

「どうぞ、宰相様」

「ああ」

白い手袋をした宰相が書類の束を受け取り、パラパラとめくり始めた。

——書類を持ってきて欲しかっただけ？

書類に目を通す彼を、メルティはジッと見つめた。文字を読むため、紫の瞳が横に動いている。

ぼんやり彼を見ていたメルティだったが、ふと彼の首元に視線がいった。

——あ、このリボンかわいい。

宰相は肩ほどまである髪を後ろで結んでいた。

使われているリボンは紫で、端に金のラインが入っている。ツヤツヤと光沢のある生地が上品で大人っぽい。

白いシャツの第一ボタンまできっちり閉めている彼のファッションは、少々古臭く見えるが、今どきなかなか見ない古風なイケメンではあると思う。

——でもねえ……。

メルティが物思いにふけっていると、書類に目を通し終えた宰相がこちらを見下ろしてきた。

「最終受付時間の十分前だ」

彼は胸元の懐中時計を取り出し、厳しい口調で言った。

——この言い方がなあ。

基本的に、彼の言葉は高圧的に始まる。

叱咤しったや注意は日常茶飯事さはんじで、女性から見て彼は恋人にしたいくない残念な男性だった。

メルティは宰相のお小言こごんに怯えるでもなく、ぼんやりと彼を見上げた。

「なぜいつも遅い」

宰相は続けて問いかけてきた。

紫の瞳が細められ鋭く見つめてくる。

どうやら宰相は自分の元に書類を届けられるのが遅く、それが気に入らないらしい。

——うーん、それは……。

メルティは困った。

なぜと言われても、それはメルティが宰相へのお届けを最後に回しているから、としか言いようがなかったのだ。

さっさと届けにこればいいのだが、つつい後回しにしてしまうのが悪いクセだ。

——だって、仕事中に怒られたら、残り時間のやる気が半減するんだもん。

その点、仕事終わりならば怒られたとしてもすぐに同僚に愚痴ぐちをこぼせる。

しかし、そんなことをバカ正直には言えない。

「書類の受付時間は厳守すべきだ。安易あんいに十七時を過ぎても受け付けてもらえないと思うな」

黙っていると、宰相が口を開いた。

——時間を過ぎたわけでもないのに怒られても……。

別に書類を届ける順番は明確に決められていない。日によって回る順番は変わるし、書類が多い部署にはまとめて持つていくため必然的に最後になることも多い。

メルティはうーんと首を捻ひねった。

素直に領き謝るべきか。反論すべきか。

「組織というのは互いが時間を意識し動くことで円滑えんかつに回っていく。特に、運搬うんぱんを任される者は意識して速やかに——」

そうしているうちに、宰相が教えを説いてくる。

——あ、そうだ。ややこしいから躲かわしちゃおう。

メルティは彼の言葉をわざと遮さへきり、ひときわ明るい声を上げた。

「はい！ 時間を守るのは大切ですよね。私も宰相様と同じ意見です。受付時間を過ぎれば、皆さまの迷惑になりますから。けれど、よかった！ 今日に間に合いましたね！」

両手を合わせ、顔の横に持っていく。

首をコテッと横に傾けて、子供のように無邪氣むじゃぎに笑うと、言葉を遮さえぎられた宰相がわずかに口を開いたままかたまった。

「なっ……そ、そうではない。俺はもっと余裕を持って行動するようにと、だな……」

「え……？ あ、はい！ 時間を守るんですね！」

謝るでも反論するでもない。メルティは第三の選択をした。

あえて、おバカっぽく振る舞ったのだ。

「だから……」

「これから時間を過ぎないように頑張りますね！」

につこりと笑みを浮かべると、彼は開けていた口を閉じた。

こうなればメルティの勝ちだった。

相手に主導権を握らせず、自分のペースで話す。これがメルティの編み出した職場の年上男性たちと話すコツ。

総じて職場のおじ様たちというのは厄介な生き物だ。気分です事をして、周囲の部下たちに威張いばり散らすこともしばしば。

しかし、そんな彼らにも一つ弱いものがあつた。

「宰相様は、いつも時間通りに行動されていて凄いですね。夜遅くまで執務をこなされて、朝寝坊はしないのですか？」

若くてあざとい女性だ。

メルティは目を丸々と開いて上目遣いで彼を見つめた。

すると、宰相はわずかに目を逸らした。

「いや……俺は寝坊などしたことがない」

そして、まんまとメルティの話に返答をしたのだった。

こうなれば、後は簡単だ。

メルティは口を縦に開いて、驚いた顔をした。

「ええ!! 一度もですか!」

「ああ」

オーバーなりアクションをして、相手に興味を持ってみせる。

「すごい!」

「……」

そして、心底感心して褒めれば、年上男性は大抵いい気になってくれる。

宰相は照れ隠しか、唇を強く閉じ合わせた。

——うん、これでもうお小言こごとを言われることはなさそう。

色々な年上男性たちと関わってきたが、彼はわりと反応のわかりやすいタイプの人だ。実は、怒りっぽい人というのは感情的なため転がしやすかったりする。

「すごいなあ、私も朝に強くなりたいなあ」

メルティは独り言のように呟き、手を開いたまま指先だけを交差させた。ボソリと褒めると、彼はわずかに灰色の眉毛を上げ唇を動かした。

「……お前は朝、寝坊をするか？」

「します、します！ 今朝なんて眠た過ぎて、もうベッドと結婚したーい！ って思ってたくらいです」

うんうん頷き、肩を揺らして感情を表現する。

「結婚……」

宰相は訝うしろめしげな顔をした。

ジッと目が合い、メルティはニツコリと微笑んだ。

宰相がわずかに目を見開く。

すると突然、宰相が眉を寄せブツブツ言い始めた。

「……これは。やはりそうなのか……いや、そうとしか考えられない。結婚、結婚だぞ……」

「宰相様？」

不審な態度にメルティは首を傾げた。

——難しい顔して、また不機嫌になっちゃったのかな。

彼も楽しそうに会話していたし、特に怒らせるようなことはしていないのだが。

「……プットカマー」

「はい、なんでしょう」

語尾を弾ませ、まつげを動かすと不思議そうに頭を傾けた。ツインテールの髪が揺れ、紫の瞳が動きを追う。

「お前のその態度……」

彼はそこで一旦、言葉を区切った。

そして、短く息を吐いた。続けて口を開く。

「……以前から、薄々と気づいてはいたのだ」

——気づいていた？ 何だろう。

声色から、何やら真剣な話のようだ。

もしかして、調子に乗ってバカを演じ過ぎたのだろうか。メルティは少し焦った。

「なにゆえ、こういったことは初めてなものでな……草稿そうごうに時間がかかった。だが昨日きのうようやく完成したので、遅ればせながら聞いてくれるか」

彼はそう言うと言を伏せた。白に近い灰色のまつ毛が下を向く。

——そうこう？ 何か聞いて欲しそうにしているけれど……。

「えっと、宰相様さうさまだまが話したのであれば」

宰相の態度は怒る前のピリピリした感じではなかった。例えるならば、自分が主役の舞台を目前に控えたときのような、緊張した面持ちだったのだ。

だからこの時、メルティは全く気づいていなかった。

人生の二十年間であみだした処世術しよせいじゆつに、大きな弱点があつたことに……。

言葉を待っていると、宰相は一度、咳払いをしてから話し始めた。

「それでは……『俺はメルティア・プットカマーを非常に仕事熱心で明朗快活めいろうかいかつな人物だ

と思う。日々、執務室に足を運び満面に喜色を表すさまは婉美であり、率直に好感を抱く』

薄く形の良い唇からスラスラと言葉が発せられる。メルティは顔を強張らせた。

——……めいろうかいかつ？ きしよく？ えんび？ ……何言ってるんだらう。

なにやら難しい熟語が飛び出してきて、メルティは意味を上手く理解できなかった。おおよそ日常では聞くことのない言葉が並べられており、自然と眉が寄ってしまう。

だが、『仕事熱心』と言っていたので、普段の仕事態度を褒められているのかもしれないと思った。

だからメルティは曖昧に微笑んだ。

すると、宰相は頷いた。

「そして……『他者とは異なる態度から、心境については把持している。初めは戸惑うばかりであったが、そんな姿を見ているうちに、俺の心境にも変化があった。プットカマーの来訪を心待ちにしている己がいるのだ。このように遷移する己の態度から、俺はプットカマーに懸想しているといえるだろう。ついてはこれからの交際について勘案する必要があると思うのだが』」

「はい……？」

長々しい文言に目を丸くする。

——はじ？　せんい？　かんあん？

メルティの頭に大量のハテナが浮かぶ。宰相は異国の言葉でも話しているのだろうか。こんがらがる頭でなんとか意味を汲み取ろうとするが、メルティの辞書にそんな難しい言葉は載っていない。

ただ『来訪を心待ちにしている』とあったので、書類のお届けの話かもしれない。

——ああ！　わかった！　さっきの早く書類を持ってこいって話の続きね。

役人は時々、難しい言葉遣いをするのだが、それにしても分かりにくい。

「お前はどうか考える？」

宰相が真剣な表情で問いかけてきた。

その問いを、メルティは書類のお届けに関するものだと思いつ込んだ。

「はい！　もちろん、これからも（受付時間を過ぎないように）頑張ります！」

元氣よく頷く。

すると、彼はピクリと眉を動かし、どこか噛みしめるように頷いた。

「頑張る、か。ならば、俺も努力しよう……」

それから、宰相は腕を組んだ。

メルティは、いつも時間厳守の宰相が何を努力するのだろうかと思つた。

「しかし、俺はあきらかな経験不足だ。それを考慮して、ひとまずは一般的とされる男女交際を行うべきだと思うのだが、それで構わないな」

「ん？」

特徴的なハスキーな声で彼が言つた。

メルティはかたまる。

——あれ？　今、なんて？　だんじょこうさい……？　だんじょこうさいって何だっけ？　えっと、男女の交際だから、つまり……。

次第にピンク色の小さな唇が開いていく。

そして、メルティは驚愕きょうがくの表情を浮かべた。

「だ、男女交際——!？」

限界まで目を見開き、大きな声を上げる。

「ああ、いや、その言い方は古臭いか。さすがに七つも離れていると年代を感じるな。」

この場合は……………こ、恋人、と言うべきか」

驚くメルティに対して、宰相は恥ずかしそうにあきつての言葉を述べた。

たしかに彼は七歳上の二十七だが、メルティはそんなことに驚いたわけではない。

——なっ、えっ？　へっ？　こ、恋人？

メルティは混乱していた。

仕事の話をしていたはずなのに、いつの間にかプライベートな話にすり替わっていた。しかも、『恋人』——なんて、鉄血宰相と呼ばれる彼には全く似つかわしくない話題にだ。

——恋人……それって、宰相様に恋人がいて、私は今、その話をされている？　って
こと……？

よくわからないが、恐らくそういうことだろう。

「わあ……宰相様もそういうお話をされるのですね……珍しくてビックリしました」

メルティはぎこちない笑みを浮かべた。

「ずいぶんと他人行儀だな。ようやく俺がお前の告白に応えたというのに」

サラリととんでもないことを告げられる。メルティはのどの奥が見えるほど、大きく

口を開いた。

「こ、告白——!？」

またしても大声を上げたメルティに宰相が不可解そうに眉を寄せる。

メルティは口をパクパクと動かし、自分と宰相を交互に指差した。

——わ、私が、宰相様に、告白を……!! いったい、いつ、どこで!!

全く身に覚えがない。メルティは意味がわからなかった。

しかし、あの真面目な宰相が嘘をつくとも思えない。

探るようにまじまじと宰相を見つめると、彼は心なしか恥ずかしそうに顔を背けた。

——なっ……!

これは、どうみても冗談なんかではない。

どうしてこんなことになったのかわからないが、メルティは知らない間に宰相に告白したことになる。いた。

——いったいどうなっているの……!

メルティは口を手を当て狼狽^{うろた}えた。

実は、処世術^{しよせいじゆつ}を駆使^{くくし}して仕事を行っていたメルティは、知らぬ間に致命的なミスを犯

していたのだった。

メルティの編み出した処世術『あざとき攻撃』は中年のおじ様たちなら、愛想のいい子だと優しくしてもらえるだけだが、若い男には少々、効果が違った。

というのも、まれに若くて女性慣れしていない男性の中には、女の愛想を自分へ向けた恋愛感情だと勘違いする者がいるのだ。

——でも宰相様はあの厳しすぎると噂の鉄血宰相なのよ……。

もちろんメルティだって、いたずらに若い男性をその気にさせないよう気をつけてはいた。

しかし、宰相である彼は歳よりもずいぶんと大人びて見え、その落ち着き払った態度と厄介な怒りグセから、つい処世術を使ってしまったのだ。

つまり……メルティは、宰相に惚れられる可能性を完全に見落として接していたのだった。

——な、なんてこと……。

メルティは自分の失態に気づき頭を抱えなくなった。しかし、何とか耐え目の前の宰相を見つめる。

「その……確認なのですが、もしかして宰相様は今、私の告白？　にオーケーをだした……のですか？」

「ああ」

——ひえっ……。

詳しいことはわからないが、今、メルティは宰相に告白したと勘違いされた上、しょうたく承諾の返事まで貰ってしまっているらしい。

——そ、それは流石にマズい……。

じわじわとメルティの背中に汗が滲む。

「では、宰相様は、わ、私のことを好き………ということですか……？」

「むろん無論、しょうたく承諾するからには好意はある」

ハッキリと言い切られあぜんとする。

——そんな堂々と言われたら、余計に誤解を解きにくく……。

しかも、よく見ると答えた宰相の顔が全体的にほんのり赤い気がする。

今まで怒る以外で顔を赤くすることなんてなかったのに、これは非常事態だ。

いつもはすましている彼が、顔を逸らし、チラチラとこちらをうかがってくる。

「……ど、どうしよう」

メルティは困った。これまで王宮で働いていて一番困ったといっても過言ではない。適当な男ならまだしも、相手はこの国で王族の次に力のある人物だ。

「迷うということは、お前も恋人同士の交流を知らないくちか。そうだな、それではやはり、一般的な慣習かんしゅうにならっていくべきか」

思考を巡らせていると、目の前にいた宰相が一步前に出た。

距離が近くなり、メルティは本能的に後ろへ下がろうとする。

しかし、その前に彼に抱きしめられた。

ワインレッドのジャケットに隠された筋肉質な腕が背中に回される。男のかたい胸板がほおに当たった。

「さ、宰相様……!!」

突然、異性との距離がゼロになりメルティは赤面した。

「驚くことはない。これは一般的な慣習かんしゅうだ」

「えっ!!」

硬直するメルティを安心させるため、宰相は抱きしめた手でメルティの後頭部を撫で

た。

インクの香りがする。それは書類仕事の多い彼の手に染みついた匂いだった。背の高い宰相の胸は広く、すっぽりとメルティを包み込んだ。

「あつ、えつ、さいしゅうさま……」

——い、『一般的な慣習』ってなに……？

急な抱擁に慌てながらも、メルティは謎の言葉が引つ掛かった。

「一般的な慣習では、思いが通じた男女はできうる限り早く情を交わすものだそうだ」

「じよ、情……!!」

彼はものを知らない人に教えるように言った。

耳元でささやかれるハスキーな声が色っぽい。しかし、告げられた言葉は想像を絶するものだ。

情……つまり、男女の性行為だ。

——できる限り早く情を交わす……ってなに!! どういうこと!!

聞いたことのない謎の情報を教えられ、メルティはますます混乱した。

——一般的な慣習って、つまり常識って意味……よね？ 多分……。

言葉通りに受け取るならばそうなるが、彼の言葉遣いはメルティには難解すぎる。

——今のこの状態……わ、私はどうすれば……！

メルティは緑の目を彷徨^{さまよ}わせ、口をパクパクと開閉させた。

こんな風に異性に抱きしめられれば、誰だってドキドキしてしまう。

しかも、彼は年上だがまだ若い。性格には難があるとしても、客観的に見たら体型も顔も人並み以上、家柄もよく、スベックだけ見るとハッキリ言って雲の上の人だ。

——そんな人に好かれるなんて……。

意味不明な状況でも、好かれていると思うと胸がムズムズとくすぐつたい。勘違いとはいえ、好意を持たれ嬉しくないはずがない。

——うう……何だろうこの気持ち。

メルティは頬を染めた。

黙って抱きしめられていると、宰相は少し身体を離し顔を見つめてきた。

近い位置に紫の瞳がありドキツとする。

「慣^{かん}習^{しゅう}とはいえ、今は就業時間。……すまないが、今日は口付けのみで我慢してくれ」
机仕事をするためか、彼の肌は男のわりに白い。鼻筋も通っていて、逆立つ細めの眉

が凜々しい。

——そういえば、まだ仕事だったかも……。ん？ まって、口付けって……。私、今からキスされるの!!

宰相の顔を観察していたメルティは、言葉の意味に気づき愕然がくぜんとした。

女学校出身のメルティは異性と口付けを交わしたことがない。

それどころか、よく考えてみれば、男性とこんなに近づいたのだって今が初めてだった。

色々と初めての出来事に、メルティの体温が上昇していく。

「あ……その……」

いつもは男性を転がしているというのに、そんな余裕はちっともなかった。

メルティは小さな口を動かし、懸命に何か言おうとしたのだが上手く言葉が出てこない。

「恥ずかしがることはない。誰もが通る道だ」

「あつ、えっ……」

彼は真剣な顔をしていた。

心臓がバクバクと激しくなり始める。

「プットカマー」

優しい声で名前を呼ばれた。

いつも不機嫌そうに閉ざされている宰相の口元が上がり、緩やかな弧を描く。反対に目尻が下がると、彼の表情が柔らかくなった。

なんと、鉄血宰相が笑ったのだった。

思わず目を瞬く。

——あ……ちよつといいかも。

不覚にも、メルティは宰相の笑顔に見惚れてしまった。

綺麗な顔に笑みを浮かべるのはズルい。それに、あの厳しい宰相が優しくささやくな
んてギャップがすごすぎた。

ボーッと見惚れていると、彼は背の小さなメルティに合わせるため少し屈んだ。

彼の顔が近づいてくる。

光が当たって紫の瞳がピンクに見えた時、唇に柔らかな感触がした。

「んっ」

一瞬だった。

薄くて柔らかい唇が押し付けられ、離された。

灰色の髪が影になり、彼の瞳を紫に戻す。

——キス……しちゃった。

片手で唇をおさえる。

遅い動きの口付けを避けられたはずなのに、メルティはつい受け入れてしまったのだ
った。

「これが口付けか……」

しみじみと言った宰相がメルティを離す。彼は発見と満足を足したような表情をして
いた。

余韻よゐんに浸っているのか、押し黙った彼を見て、メルティはむず痒がゆい気持ちになった。

——うう……恥ずかしい……。

唇に柔らかな感触が残っている。

一瞬だったが、温かな体温まで伝わった気がする。

ドキドキと高鳴る胸を、メルティはなんとかおさえようと深呼吸した。

流れで異性とのファーストキスを奪われてしまったわけだが、不思議と嫌な感じはしなかった。

——キ、キスくらい減るものじゃないし……なにか誤解があったんだから、し、仕方ないよね……？

あくまでこれは事故だ。メルティは自分に言い訳をした。

彼を見ると、同じように唇を白い手袋をはめた指先でなぞっていた。

初めての口付けに感嘆する中、先に正気を取り戻したのはメルティだった。

——でも……キスはいいとしても……よくわからない告白や恋人うんぬんは……ちょっとマズいかも……。

ことの発端は、宰相の告白発言だ。メルティは身に覚えのない告白をしたことになっており、そのせいで、あれよあれよとキスまで進んでしまった。

——そういえば情がどうか言っていたし……。

このままでは、彼はメルティと付き合ったと思い込んだまま、もっと危ないことをしてくるかもしれない。

さすがのメルティも多少の危機感を抱く。好きな相手ならともかく。

——鉄血宰相はねえ……。

まだ二十歳になったばかりのメルティは、職場で上司と恋愛しようだなんてこれっぽちも考えられない。

だから、これから詳しい事情を聞いて訂正しよう。そう思ったのに……。

「あの、宰しよ……」

ゴーンゴーン——。

メルティが呼びかけると同時に、十七時の鐘が鳴った。音が王宮中に響き渡る。

大きな音に遮られたメルティは、音がやむのを待とうと口を閉じた。

「ん？ 定時か」

宰相が何やら呟く。

——もう、タイミングが悪いなあ……。

メルティが息を吐いていると、なぜか細い手首を掴まれた。そして、そのまま手を引かれた。

「えっ、あの宰相様？」

彼が歩き出し、引っ張られるままに足を踏み出す。

宰相は真つ直ぐに扉に向かったのだった。

——なんだろう？

不可解な宰相の行動に驚いていると、彼はドアノブに手を伸ばした。

そして彼は扉を開けメルティを廊下へ出るよう促した。それから——。

「それでは気をつけて帰るように」

鐘がやむと同時に言い、宰相は黒塗りの扉を迷いなく閉めたのだった。

「えっ」

突然、メルティは放り出された。

目を丸くしていると、ガチャリと鍵のかけられる音が聞こえ、扉が完全に閉ざされたことを知る。

静かな廊下には人氣がなく、メルティが佇たたずんでいるだけだった。

「えっ……。えっ、えええ——!？」

そうして、メルティの困惑する声は廊下に響き渡ったのだった。